

# PAPPAPARADISE SPECIAL DIALOGUE



**HIKARU UTADA**

**HIROTO KOHMOTO**



**PAPPAPARADISE  
SPECIAL  
DIALOGUE**

BY **CHRISTOPHER YOUNG**

PHOTOGRAPH BY **CHRISTOPHER YOUNG**

STYLING BY **CHRISTOPHER YOUNG**

HAIR BY **CHRISTOPHER YOUNG**

MAKEUP BY **CHRISTOPHER YOUNG**

PROP STYLING BY **CHRISTOPHER YOUNG**

ART DIRECTION BY **CHRISTOPHER YOUNG**

PHOTOGRAPH BY **CHRISTOPHER YOUNG**

STYLING BY **CHRISTOPHER YOUNG**

## 宇多田ヒカルと甲本ヒロト、初コラボを終えて。

### 自分の「好き」を楽しむには？

宇多田ヒカル（以下、宇多田） 今日ではありがとうございます。すごく楽しかったです。

甲本ヒロト（以下、甲本） こんなのがやったことなかったからね。でも、やってみたら楽しかったね。普段自分らのバンドでやる時はもっと簡素な感じで、こんなしっかりしたセットで撮影することってほとんどないから。

宇多田 最初からそう決めてやっているんですか？

甲本 求められてもできないからね。パバツと終わらせてください、みたいな。

宇多田 じゃあ今日は普段やらないことをやってもらえて貴重ですね。

甲本 多分、性格的にめんどくさがりなんだと思う。頑張ったらできることも頑張らないんだよ。

宇多田 あ、さっき、肩が凝らないとおっしゃっていましたよね。

甲本 うん、全然凝らない。

宇多田 さっきの撮影中、私がバイクでヒロトさんの後ろに乗って、位置的に肩を揉んであげたくなっただんですけど「揉まなくていいよ、全然凝っていないから」って言われて、私はガチガチなんですって言ったら、「苦勞されているんですね」って（笑）。ヒロトさんは子供の頃からずっとそうなんですか？

甲本 うん、僕はもうずっと、いつも「逃げ」。めんどくさそうと思ったらスーッと逃げてた（笑）。

宇多田 それは「逃げ」と言うけれど、賢いですよね。

甲本 その代わりに、逃げた分だけ余裕とか自由な時間がいっぱいできるでしょ。そうしたらその分、自分の好きなことができる。

宇多田 ああ……私がまさにこの歌で書きたかったことを今ヒロトさんがおっしゃって、ちょっとウルツときちゃった。嬉しいです。今回このコラボを思い切ってお願ひして、実現して、今こうやってお話しさせてもらっている、ということが全部繋がって、感激しちゃいました。ヒロトさんは「自分に合わないことを避けて、それでできた時間で好きなことがいっぱいできる」とおっしゃってましたが、私は「これは好き」、「これは嫌だ」とか「これやりたい」という感覚があまり分からずに生きてきたんです。その結果として色々なことをやれたけれど、「自分はこれをしたい、これはしたくない」ということを把握するのにすごく時間がかかって。今でもまだ探っているし、探り続けていこうなと思うけれど、最近やっと、嫌だと思ったらちゃんと言えるようになってきたんです。気づいたら肩が凝る人生になっちゃってたけど（笑）。

甲本 でも、この曲に参加させてもらったのもそうだけど、頑張ったらできることもあるんだなとも、ちょっと思ったよ。

宇多田 ヒロトさんにとって今回のコラボは「チャレンジ」という感覚でしたか？

甲本 そう。今回ね、引き受けなきゃいけない、それこそやっぱり「Automatic」ですよ。あれを初めて聴いた時に、この曲はとにかくすごくポピュラーになるぞ、というのはすぐに分かった。でも自分で「Automatic」を歌ってみた時に気づいたのは、僕が聴いてきたりやってきたりした音楽とは全然違う成り立ち方をしているということ。でも、その全然違う音楽を歌ってみた時に、なんかこう……楽しかったんだよね。それがずっと思い出としてあって。だから今回お話をいただいた時に、宇多田さんの歌を本当に一緒に歌えたらどんな気持ちができるだろう、と興味があった。だから頑張りたいと思ったよ。自分がやってみたいからやる、っていう思いでした。

宇多田 本当に嬉しいです。それまで面識もなかったですし、「引き受けてはいただいたものの、どういう感じになるだろう」と思いながらスタジオで初めてお会いして。この歌は他の誰かに歌ってもらうことを全く考えずに作ったものだったので、キーや歌のスタイルに違和感がないか心配していたんです。だから「アレンジしてもいいですし、お好きなように歌ってください」とお伝えしたら、「大丈夫、覚えてきたから」と言ってくださって。その時に「登ってみたい山だと思ったので」とヒロトさんに言ってもらえたのが、すごく印象に残っています。

甲本 違和感を感じるために、来たんです。

### 宇多田・甲本、それぞれの音楽体験の原点

甲本 もともと僕は、中学1年生の時にロックンロールを初めて聴いて。それまでは、自分には何もできないような気がして生きてたんです。大人になってまともな仕事に就けるイメージが全く持てなかった。将来の夢を聞かれても、正直に言うとか安楽死。「痛くない死に方がいいな」とずっと思っていたし、でも両親は先に死ぬだろうから、そうしたら俺は餓死しかないなと。だけど、ロックンロールを聴いてやっていくうちに「あ、これならできる」と思ったんだよね。そこから僕はもう「できる」と思ったところに行っていない。

宇多田 ロックンロールとはどうやって出会ったんですか？

甲本 ラジオ。それまでは音楽にも全く興味がなかったんだよ。特に外国語の音楽は、日本にいる外国人のために流してるものだと思ってたから、自分とは関係ないと思ってた。でもある日、自分の部屋で流れてきたラジオを聞いたら急にポロポロツと涙が出てきて、わんわん泣いて、量をかきむ

ったりなんかしてるの。「とうとうおかしくなった」なんて思ったんだけど、でも何か原因があるんだと思って。今

思えば、感動してたんだよね。音楽なんかに感動するわけがないと思っていたから、自分が感動してるってことに気づかなかったんだよ。それで「もっとこんな堪らない気持ちになりたい、だからもっと音楽を聴こう」、「死ぬまで音楽を聴きたい」と思ったのが、最初の夢。それが12歳の時で、小学校から中学に上がる春休みだったね。

宇多田 素敵です。それまで音楽以外のものでそういう風になったことはなかったんですか？

甲本 うん、そんなものはなかったよ。映画を見たり、本なんかを読んで脳みそでは感動していても、ロックンロールから受けた感動は理屈じゃなかった。いまだに何がいいのか分からないけれど、聴いたらワーツとなる。それは今でもずっと続いてて、レコードに針を落とせばすぐにそうなる。

宇多田 私は、音楽との出会いというものがないんです。父親も音楽をやってましたし、母親がそれこそ情熱的に音楽が好き人だったので。だから自分にとっての音楽の根源と言ったら、お腹の中にいる時に聞いていた母親の心臓や内臓の音、話す声、歌う声、歩いている時のリズムとかなんじゃないかな……そういう五感の感覚に、音楽を感じていたと思う。私は第一子ですけど、生まれた時にはすでにお兄ちゃんみたいに音楽が先にいて、家族の中で大事な存在としてそこにいた、という感じもあって。

甲本 音楽が質量を持って、すでにそこにあったんだね。

宇多田 時間とか時空とかと同じように、当たり前存在してました。だから初めて「感動」という経験に触れたのは、なんだろう……もしかしたら、親が音楽に感動している、という様子を見た時かもしれない。その後、自分で音楽に最初に感動したのはそれこそ私も12歳くらいの時、東京のインターナショナルスクールに通っていた頃ですね。初めにすごく感動したのはクラシックだったんです。学校の校長先生が元オペラ歌手だったので、授業で色んな時代のクラシックを聴いて、それがとても面白かった。そこでモーツァルトのレクイエムを聴いて大好きになって。なんだかすごく楽しそうに聴こえたとし、聴くと何故だか泣いちゃうんです。当時は「レクイエム」の意味も知らなかったのに「死ぬ時にこれを流してほしい」と思って、一人でベッド

の中で聴いていました。

甲本 鎮魂歌だからな。

宇多田 そう、だからその後レクイエムの意味を知ってびっくりしたんですよ。さっきヒロトさんがロックンロールに目覚めた頃に自分の死に方について考えていたと話されてましたけど、子供には「死ぬ」ということに気づいて、興味を持つ時期があるらしいですね。私も子育てを経て知ったんですけど。

甲本 自然に考えるよね。でも、僕が初めて音楽で感動した瞬間のことを表すとすれば、「生まれた！」だった。僕という人間の誕生と自我の目覚め。「俺、生まれた！」と思ったら、ここに自分の脚がある、腕がある、って気づいたりなんかしてさ。その瞬間、全てがプワーツと見えただよ。

宇多田 自分と音楽との出会いが、自分との出会いだった、と。

甲本 うん、世界との出会い、っていうかね。それで僕がよく言うのは、ロックンロールに限らず、本当に心から感動するものに出会ったら、それは扉なんじゃないかってこと。開けた瞬間に、そこに全部があるような気がするんだよ。だから、一つの音楽だけを聴いている人には「扉を開けてごらんよ、全部好きになるよ」って思う。開けたほうが面白いからさ。

### 曲作りは「ろくろ」?「釣り」?

宇多田 私は音楽を聴く時より、作る時に「扉を開ける」感覚がありますね。普段は、その扉は閉じているんです。

よく友達には、普段の私と、私が作った曲から感じるイメージにギャップがあるって言われるんですけど、音楽を作る時だけいつもはアクセスしていない領域に潜っていく感じがある。それで、一人きりで安全だ、という気持ちになった時にパツと扉が開くんです。だから、曲を作ると自分自身に対して新しい発見に気づくこともあって、何を作ろうとしているのかも、作りながら見つけていく感じで。

甲本 そこは僕も一緒だよ。自分が作った曲なのに、自分でも驚くことはあるよね。





40年くらいミュージシャンをやっていると、インタビューなんかで曲作りについて何百回も聞かれるじゃない？それでどう表現するかちょっとずつ練習してきて、今、僕はどうやって説明するかというと「ろくろを回す感じ」って言うんです。まず、元の粘土がないと何もできないじゃない。でもある日突然、その元になる曲のイメージが出来上がってるんだよ。それでそれを形にしたいから、ろくろの上に置いて、回しながら触ってるうちに、意図せず「これ！」という形になる時がある。それが完成。どの指にどれくらい力を入れたかなんて説明できないけれど、その感覚。

宇多田 ああ、わかります。私はここ数年、「釣り」に喩えますね。釣り、実際にはしたことはないんですけど、イメージで(笑)。作っている間はずっと、ご飯食べてもお風呂入っても、何をしてもどこかでその歌のことを考えていて、無意識にこねこねしているんです。そうしているうちに、ふとした瞬間に「これだ」というものが出てくるので、それを忘れないように書いたり録ったり。トータルでは時間がかかっているんですけど、座って考えて、という時間はそんなにない。だから自分やっている仕事って、大半は「待つこと」だになって。そこに居て生きていることが役目で、それが私がやっていること。針を垂らして待っていて、潮目が変わったり自分がコツを掴んだりして、魚が掛かった瞬間に「よし」と竿を上げられるようにしているというか。

甲本 その喩えもすごくよく分かる。僕もその感覚、あり

ます。ひらめくまでは、何も起きない風の海面が見えているけれど、突然ビビッと来るんだよな。

宇多田 (自分との)対話ですよ。自分で今どんな気持ちなのかを楽器や音で探っていくうちに対話ができて、自分は今こんな気持ちだったんだっていうメロディができてるとか。だから、自分には音楽っていうものがあってよかった、と思う。もしそれがなかったら、私どんな職業に就いてたんだろう……親がミュージシャンだったからそれゆえの不安定な様子も知っていて、だから「私は安定したお仕事に……」なんて思っていた記憶もあるんですけど、でも今振り返ると、それも続かなかっただろうなと思います。

### ライブの秘訣は「気にしないこと」

甲本 あ、ライブについては、一つ忠告ね。始まる前に、ニンニクの強い餃子はダメ。演奏中にゲップが出た時に、自分の匂いで一気に現実に戻るから(笑)。すごくいい感じで歌っているのに、お昼ご飯の風景がバツと浮かんでしまう。

宇多田 (爆笑)。わかりました、息が臭くなるものには気をつけます(笑)。他にライブをやってきて学んだことって、ありますか？私はツアー経験が少なくて、やるたびに学ぶことがいっぱいあるんです。

甲本 気にしないことだね。こんなふうに歌いたいという

ゴールが見えていないんですよ、僕は。できることをやろうと思ってステージに登って、その瞬間一生命やったらどうなるんだろうということしか考えていない。板の上に乗った一時間半とか二時間の間だけ全力でやれば、自分を許せる何かがあるような気がして。それで「一生命やっただからいいじゃん」っていうね。僕も自分が実際に何ができたかなんか、いまだに把握してない。その代わり、後で言い訳しなくていいように頑張る。それだけです、ライブは。宇多田 カッコいい。先のことも前のことも考えないでそこにいるって、禅みたいな考え方もありますけど本当に難しいとされていることですよ。でも、ライブがなければ辿り着けない領域でもあって。(ヒロトさんの)ライブ行きたいです。なんで今まで行ったことなかったんだろう。

甲本 たぶん面白いと思うよ。見たことないけど(笑)。

宇多田 自分のライブは見られないから(笑)。近々きつとお邪魔します、楽しみ。

甲本 自由ですよ。差し入れもいらさないし、手ぶらで。ライブっていうのは、その日来てくれるお客さん全員が王様だからね。みんなその席で自由になる権利を得ているんだよ。ステージの上の人を応援するつもりもなくていいしね。何も気を遣わずに楽しめばいい。

宇多田 私も、ライブの時にお客さんが何人いても「大勢」に見えなくて。それぞれ一人ひとり、にしか見えないんです。だからMCで喋ると普通に戻っちゃって、自分で戸惑うというか……。ライブ経験がないまま有名になっちゃったから、昔は、みんなから期待されている感じとどうしたらいいかよくわからない感じとが相まって、素の自分じゃないベルソナを頑張って作ってしまっていて。「ついてこい！」みたいな、私の思うカッコいいロックンロールのミュージシャンみたいにやろうとしてました。でもある時に、「この状態でいいんだ、寝起きの自分とステージ上の自分もそのまま同じでいいんだ」と思ったら、すごく気が楽になった。この前のツアーのMCでも「待ち合わせがうまく行ったね」とか言ったんですけど、ライブって、来てくれるみんなの一人ひとりの時間なんだ、って考えるようになったら楽しくなりました。

### 有名になる、ということ

宇多田 ヒロトさんは、有名になって、街で周りの人に気づかれたりするようになった時の感覚って、覚えてますか？

甲本 戸惑ったよ～、そんなつもりじゃなかったから。街を歩いて声をかけられたりして、精神的にも不安定になった。こんな風に扱われるためにやっているんじゃないと思って。今でも褒められると過大評価されているような気がしてさ。自分がやりたいことをやっているだけなんだけどな、と思う。

宇多田 尊敬を表現するのって、する方もされる方も難しいですよ。こっちは「そんなんじゃないけどな」と寂しく感じることもある。そういえば息子に「褒められた時にどうしたらいいかわからない」って言われたんです。だから「褒められたら『ありがとう』って言えばいいんだよ」って答えたなら、「なんでもっと早く教えてくれなかったの！」って(笑)。そう言いつつ私も「そっか、『ありがとう』って言えばいいんだ」って気づいて、最近では自分でもそうしてます。

甲本 その難しさは一生ありそうだよ。頑張れば頑張るほど、褒めてくれる人はいるから。褒められると僕なんかは「え～っ」って照れちゃって。

宇多田 それも含めてヒロトさんらしさということで。そういえば撮影でバイクに座っている時に「落ち着く」とおっしゃってましたけど、この対談もバイクに乗ってもらったらよかったかなってちょっと思いました(笑)。改めて、今日は撮影楽しかったです。

甲本 僕、場違いじゃなかった？

宇多田 場違いなことなんてないですよ！撮影中も、ライブで歌っているみたいな高揚感がありました。どこにいても、ヒロトさんにいてもらえたら最高です。

甲本 たまにはこんな経験もいいなと思いました。ありがとうございました。

宇多田 ありがとうございます。





好きなことをしたい



愚か者でいいじゃない



がんばる君の最前列に  
シュビドゥビ ドゥビドゥビ



パッパパラダイス



期待しちゃうとガッカリするかも  
それがどうした？次の楽しみが  
ドアの向こうで待ってるよ

斜め掛けたスイカのバッグに  
大事なものがいっぱい+キャンディorグミ



財布は入ってない



不思議を信じてたい



変わり者でいいじゃない



がんばる君の最前列に



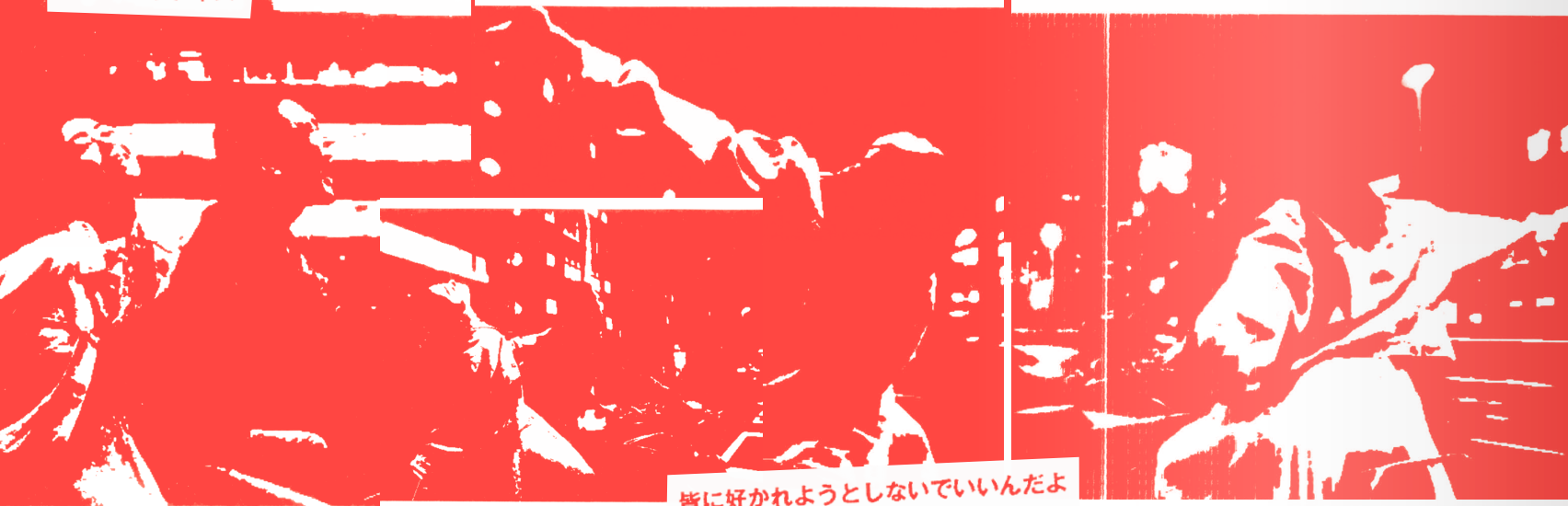
シュビドゥビ ドゥビドゥビ

ずっといたい ドゥビドゥワ





パッパパラダイス



皆に好かれようとしていないんだよ  
人気者には人気者の苦勞や  
寂しさもあるんだってよ



ぬいぐるみのバースデイパーティー



VIPリストに大人は入ってない



The sky is always blue  
When I'm thinking of you



押しでは引く波の音  
沈みたくない太陽



ここはいつまでも晴れの予報



シャララララ 今日遅刻かも



# PAPPAPARADISE SPECIAL DIALOGUE



Sony Music Labels Inc.